

総評

片山和俊 | 審査委員長、東京藝術大学名誉教授



表彰式

今回はさまざまな変更があった。リノベーションを加えたテーマ、2次にわたる審査方法、ベスト8校による映像プレゼンテーション提出など。その影響で提出時期が約1カ月早くなり、参加校の日程のやりくりや負担も増えたように思われる。変更はよかれと思っての試みであったが、すべてよかったかどうかはこれから検証し来年に備える必要があるだろう。

また選考について第1次は一般的な方法で、第2次は甲子園らしさを残したトーナメント方式でと予定していたが、映像プレゼンを見て2次も一般的な方法で絞っていくほうがよいと判断した。好敵手がぶつかり、負けると二度と浮かび上がれないトーナメント方式は、8校と少ない場合には運不運の影響が結果に出過ぎると思われた。やはり横並びに審査し、回数を重ねて絞っていく一般的な方法によるほうが間違いない。急遽変更して進めたが、結果としてはよかったと思われる。

第1次では、はじめに全員で作品全体を見ながら意見を交わし、各審査員が選んだ20校の得点を集計した。その結果から得点の多い順に決定し、徐々に絞って選定したが、その過程で各委員が選定理由を述べて合意をめざした。合意に達しない場合には多数決とした。その結果がベスト8と次点1校である。

第2次では、8校より提出された映像プレゼンテーションを全員で見た後、図面パネルと対照しつつ、各委員の講評を交え3回にわたって絞り込んだ。最後は残った上位3校を対象に多数決を取り、その結果を委員全員で確認・合意して受賞を決定した。

思い返すと今年は審査が難しかった。提出作品が、いずれも力作で粒ぞろいであったことにもよるが、大きな傾向として建築を対象としたリノベーションと地域を対象としたエリアリノベーションの2つがあったことが判断を複雑にした。前者がハード面での試みであるのに対して、後者は運動的な側面が強いソフト面からのアプローチが有効である。見方を変えれば、都市と地方の置かれた状況差が現れたようでもあった。都市ではハードな提案が未だに可能だが、地方ではハードもだが、人口減少を食い止め活性化を促すために絞る知恵や仕組み、ソフトの比重が高い。縮小する時代にはともに重要だが、どちらかを選定するとなると甲乙つけがたい。

ベスト8の中では前者が優勢で、その候補として青森工業高等学校と明石工業高等専門学校が残り、特異な歴史と実現したら面白いと思わせる空間を提案した後者が優勝となった。地の利が味方したとも言える。一方、準優勝となった江津工業高等学校は、映像でなければ伝えられない運動の広がり特徴があった。過疎の町これからめざす方向が、関係人口を増やすこと、そのためには制作者の力もさることながら、多くの関係者の町への思いを喚起し、協力体制を築いていくことにあるという主張と展開が評価につながった。さらに、ソフトとハード両面を合わせもち、緻密で優れた表現の天竜高等学校も惜しかったし、農村の過疎と正面から取り組んだ石川工業高等専門学校と日向工業高等学校の真摯な姿勢も捨てがたい。判断が難しかったのは坂出工業高等学校だ。近代建築遺産に取り組んだ意欲は買えるが、視点と解決策が多岐にわたり、近代建築遺産の何を守り受け継ぐかという肝心の焦点がボケてしまったのは残念であった。最後に町ぐるみ土木的に解いた伊勢工業高等学校は、図面で読み切れなかった内容を映像で補完できたことが評価を高めた。提案の独自性を認め、審査委員長特別賞とした。

最後に、今回の審査に取り入れた映像プレゼンテーションはよかったと思われる。スペースに限りがある提出図では、アレもコレも肝心の図が小さくなり、力点がボケてしまう傾向にあるのに対して、限られた時間の映像プレゼンでは主張がはっきりしていた。作業量を増やすことにはなったが、若い諸君がこうした表現力に長けていることを知ったことも予期せぬ収穫であった。